

私の視点

もりもと
森本 あんり
国際基督教大学教授(神学・宗教学)



本紙3月19日付の夕刊(東京本社発行)「この二」のページに、国際基督教研究所の主催で行われたシンポジウムの報道があった。クローン技術など現代的な生命倫理の諸問題に宗教界がどのような知見を示し得るかを模索するという趣旨であったが、「宗教と科学との対話」という試みそのものの可能性について、一般にやや誤解があるように思われる。

opinion news project

記事によれば、当日の報告者はクローン規制法や基礎医学などの専門家と、神道や仏教や宗教学の専門家である。いずれも各界の權威と言ふべき方々だが、その発言をみると、科学者の側が単なる技術や法律だけでは解決できない倫理問題の所在を自覚して問いかけ

の負荷がかけられている。対話という方法を取ることを自体が、すでに特定の立場を要求するからである。このことを教えてくれるのは、宗教間対話の歴史である。宗教間対話は、これまでキリスト教の側から仏教やイスラム教などの他宗教にもちかけられることが

教をその固有性において尊ぶならば、対話の代わりに儀礼や座禅に参加するなどの提案がなされてもよい。つまり、「対話」は万能でも公平でも容易でもない。少なくとも、土俵の設定に十分な準備を費やすことなしに、実りある対話は困難なのである。

がうかがえる。しかし、科学に科学固有の問いがあるように、宗教には宗教に固有の問いの立て方がある。現代科学の問いに答え得ない宗教に存在価値はあるのかという問いも、実は科学からのもの言いにすぎない。宗教によっては、浮き沈みの激しい現

◆異文化理解 対話の限界を自覚しよう

をしているのに対し、宗教者の側はそれに答えるだけの準備が十分にできていない、という構図である。

多かった。そのため、対話をはじめから言語(ロゴス)への合理化というキリスト教的な思考様式で取り仕切られることになる弊害を生んだ。

「宗教と科学の対話」も同様である。これは、そもそも宗教ではなく科学の側から提案された対話である。記事の中には、宗教は

代社会の問いに左右されないことで、かえって悠久不變の答えを用意することもあろう。

ごく最近も、タリバンの大仏破壊が国際的な非難を浴びたが、彼らに近代社会の当然の要請として「対話」を求めるばかりでは、おそらく問題は解決しない

図は、「対話」という作業そのもののものも限界についてあまりに無自覚である。対話は、対話の場や論題の設定をする時点で、それなり

このような対話には、たとえば「言挙げせず」といわれる神道は本来なじまない面をもつ。もし神道や仏

学から設定されていること

は、対話の要請そのものが実はすでに一方的な西洋文明の押しつけとみえているからである。今必要なのは、「対話」という手法そのものの限界を自覚し、異文化間の相互理解と共存を進めるためにはどのような準備が必要かという、対話の前提となる対話、いわゆる「メタ対話」の道を新たに模索することである。